

◇編集後記◇

『とい』三〇号を記念する序歌は、「ムーサへの祈り」ではなく、「汽水する心の流れ」へと語りかけはじめる現代詩人の朗誦である◆悲しみを湛えながらも、いつもと変わらず穏やかに語りかける随想家の言葉には、言葉にできない悲しみと、まぶしい太陽のような明るい希望を感じる◆国際化にとりつかれた私たちを、古代神話の世界へといざなう書評家は、近い将来問題となるかもしれない、天皇という存在について考えるヒントを与えてくれる◆原文に忠実であろうと、英語と日本語との間で格闘する翻訳家は、すでに定訳のある古典を題材に、結果の一端を披露する◇以上四編を掲載する。読者諸氏のご批判を仰ぎ、同人諸賢のさらなる投稿を期待する。<<>